今求められている父親の役割とは

埼玉学園大学特任教授　尾形和男さん

〝イクメン〟という言葉が生まれて20年。日本における父親の家庭への関わりは少しずつですが、確実に増えてきています。しかし日本では、長い間、そんな父親の姿ばかりだったわけではありません。日本における父親像の変遷と、これから求められる父親の役割についてうかがいました。

おがた・かずお●1952年、青森県生まれ。愛知教育大学名誉教授、埼玉学園大学特任教授。専門は発達心理学。共編著に『家族のための心理学』、『家族の関わりから考える生涯発達心理学』『父親の心理学』等がある。

「父親の不在」は産業革命から

江戸時代の武士や農民は、家職を継ぐ息子を大事にして子育てに当たっていたようです。家族が皆でいる時間が多く、父親が子どもに関わる時間も多かったようです。

それが変わるのは明治になってから。明治民法における「戸主権」にその源流がありました。

戸主＝父親に家の統率権限が与えられていて、家族の婚姻に対する同意権や居住地を指定する権利などがありました。その後、19世紀の終わりには日本でも産業革命が始まり、工場を中心とした外の職場に父親たちが通うようになったのです。こうして家庭では父親が不在となっていきます。

さらには国際的な動乱期が重なります。戦争を志向していく中で富国強兵という思想が立ち上がり、男は戦場に、女は銃後の守りにと、男女の役割分担が意識されるようになっていきました。

学術的には、1950年代にイギリスの精神科医ボウルビィが「子どもの心身の発達には3歳までの母親、あるいは生涯母親の役割を果たす人物との愛情に満ちた関係が重要だ」と唱えました。ところが、日本では「母親」だけが強調されてしまい、3歳までは母親のもとで育つのがよいとされる「3歳児神話」につながっていきました。そういう経緯もあって「家庭での教育は母親が行う」という認識が根付いていったのです。

「社会化の担い手」が求められている

その後、1970年代になってマイケル・E・ラムというアメリカの心理学者が「父親も育児に関わることで、母親と同じくらいの愛着関係を構築できる」と発表したことで流れが変わります。そのころ欧米ではすでに女性の社会進出が進んでいたこともあって、父親の育児・家事への参加が意識されるようになっていきました。

この流れは当然、日本にもやってきます。1980年代までは日本経済が好調だったこともあって、男は外で稼いでさえいればよいと考えられていました。しかし景気の停滞から来る収入の伸び悩みと、女性の社会進出による共働き家庭の増加で、家事・育児の担い手としての父親の役割が求